

巻頭特集 難病と疫学

「難病」の疫学研究の歴史は、昭和40年頃に社会問題となったSMON (subacute myelo-optico- neuropathy) にさかのぼります。当時の研究でSMONとキノホルムとの因果関係が示され、国の難病対策を推進するきっかけとなりました。現在、指定難病は338疾患、それぞれで必要とされるアプローチは異なりますが、原因不明であるこれらの疾患について、患者数を把握して、その原因や予後を解明していくのは、疫学の醍醐味ではないかと思っています。

1972年に難病疫学研究班が発足して50年が経過し、現在は福島若葉教授(大阪公立大学)が率いる「難病疫学研究ネットワーク」として難病研究の発展に向けた活動を継続しています(<http://square.umin.ac.jp/nanbyouekigaku/>)。そこで、長くこの分野をリードされてきた先生方に、難病疫学研究の取り組みや今後の展望についてご教示いただきました。

(大阪公立大学大学院医学研究科公衆衛生学 大藤 さとこ)

難病と疫学

自治医科大学公衆衛生学教室
中村 好一



世界的に見ても疫学の2大潮流は「癌の疫学」と「循環器疾患の疫学」である。わが国ではこれに加えて「難病の疫学」が一角を占めている。しかし、「難病」自体がそもそも行政用語で医学用語ではなく、英語ではintractable diseasesと言っているが、通じるはずもない。強いて言えばchronic diseasesだろうが、こうなると癌や循環器疾患も含まれる。

薬害スモン患者救済のための医療費公費負担を導入する目的で造られた「難病」の概念であり、従って言葉は悪いが、種々雑多の疾患の寄せ集めである。癌は1つの癌細胞が増殖拡大して健康障害を引き起こす疾患、循環器疾患は中を流れる糖や脂質も含めて心臓から毛細血管に至るまでの1本の血管

に起こる病態で、それぞれどこかつながるところがある(はずである、専門に

やっている人からは「そんなに単純なものではない」と叱られそうだが)。一方

CONTENTS

巻頭特集 難病と疫学

難病と疫学	中村 好一	1
難病疫学のススメ	福島 若葉	2
難病疫学を通じて疫学を学ぶ	村上 義孝	3
難病の疫学研究は私の原点	三宅 吉博	3
第33回日本疫学会学術総会開催に向けて	尾島 俊之	4
日本疫学会プレセミナー2023 開催決定	本庄 かおり	5
日本疫学会サマーセミナー2022開催報告	清原 康介	6

Editor in Chief 就任のごあいさつ

片野田 耕太 7

日本医学会連合 社会部会 第1回若手リトリートの報告論文 (JMA Journal) について

桑原 恵介 8

IEA-WP/JEAジョイントセミナーのご報告と 日韓台シンポジウムのご案内

郡山 千早 9

研究室紹介

近畿大学医学部公衆衛生学教室

今野 弘規 10

事務局だより 11

編集後記 11

で難病は雑多な疾患の集合体なので、「難病の疫学」と言っても各疾患によってそのアプローチは全く異なる。加えて各疾患が比較的稀(難病法の指定難病は人口の0.1%以下)なので、1つの難病の疫学に取り組むと他の疫学者の参入の余地がないという余地にも与ることが可能である。筆者の取り組んでいる川崎病は年間1万5千人ほど、プリオン

病はわずか数百人であり、世界でもトップクラスに位置することも可能である。

このような状況の中で、大阪公立大学の福島若葉教授のご尽力で「難病疫学研究ネットワーク」(<http://square.umin.ac.jp/nanbyouekigaku/>)が立ち上げられた。癌とも循環器疾患とも異なる難病の疫学について、他の研究を参考に自らの研究を進展させることや、若手

研究者の育成を目的としている(と、著者は理解している)。一度、冷やかしても構わないので立ち寄っていただきたい。

今後の医学の進歩に伴い、難病の数も増えていくはずである。それぞれの難病で「頻度分布」、「危険因子」、「予後」の疫学像の解明は必須であり、難病の疫学の需要は増加していくことが予想される。若い人たちの挑戦が期待される。

■プロフィール

自治医科大学教授。1982年同大学卒業。元Journal of Epidemiology編集委員長。第21回国際疫学会(World Congress of Epidemiology 会長(2017年)。現在国際疫学会理事(財務担当、Treasurer)。

難病疫学のススメ

大阪公立大学大学院医学研究科公衆衛生学
福島 若葉



難病疫学に携わって約17年、ずいぶん長いお付き合いになりました。多彩な病状を呈する疾患に、頻度分布、リスク要因・予防要因、予後の3つの視点から取り組むことを通じて、「疾病特性や実行可能性に応じた疫学研究の立案・実行・解釈」という一連の過程を実践的に学びました。寄稿の機会をいただきましたので、私が思う魅力とともに振り返りたいと思います。

研究の実際を最初に見聞したのは、大学院生の時でした。指導教官の廣田良夫先生が、厚生労働省「特定疾患の疫学に関する研究班」(難病の疫学研究班)の分担者をされており、班会議に連れて行ってくださいました。希少疾患の研究結果が次々と提示され、なんだかすごいなあという印象でした。2005年に大学教員となり、研究班で難病の全国疫学調査に携わる機会をいただきました。調査事務局の名古屋大学では、玉腰暁子先生が采配を振られていま

した。この頃ようやく、難病の疫学研究班の歴史は非常に長く、疫学の重鎮の先生方が礎を築かれてきたことを理解しました。歴史の詳細は、近日発刊予定の「疫学の事典」で廣田良夫先生がまとめられています。その後は同時並行で、個別難病を対象とする臨床班にも参加し、多くの経験を積ませていただきました。

難病疫学の魅力は、希少疾患のため、多様な分野の研究者がAll Japanで取り組む(取り組まなければならない)ことであり、日本の研究が世界の最先端というケースも往々にしてあります。「症例対照研究は稀な疾患に向く」は教科書的セオリーながら、「適切な対照の選択」を達成することは本当に難しいのですが、身をもって経験したことで、後進の教育や他疾患への応用に生かすことができている。難病の全国疫学調査の経験は、その後、祖父江友孝先生からお声かけいただいた、HPVワク

チンの安全性にかかる全国疫学調査にもつながりました(2022年のJEに論文公表)。その道のりは大変すぎて、夜通し語ることができそうですが、難病疫学とワクチン疫学、私が携わってきた2分野の経験を全投入し、「点と点が線」になった瞬間でもありました。

難病の疫学研究班は、中村好一先生が2014年度から6年間にわたり班長の労をお取りになって以降、「難病疫学研究ネットワーク」として自主的な活動を継続し、最近ホームページも開設しました <http://square.umin.ac.jp/nanbyouekigaku/> (尾島俊之先生、ご支援ありがとうございます)。本特集を企画された大藤さとし先生、寄稿者の中村好一先生、三宅吉博先生、村上義孝先生も世話人で、僭越ながら私が代表世話人を務めさせていただいています。「難病疫学おもしろそうだな」と思われた方、一緒に研究してみませんか。

■プロフィール

1998年大阪市立大学医学部卒業。淀川キリスト教病院に3年間勤務した後、2001年に大阪市立大学大学院医学研究科博士課程入学。2005年に大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学・助手(現:助教)、2009年に同講師、2012年に同准教授、2015年より同教授。2022年4月、大阪府立大学との統合により「大阪公立大学」に名称変更。

難病疫学を通じて疫学を学ぶ

東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野
村上 義孝



私が難病疫学調査に参加したのは今から8年前、東邦大学に教授として赴任したときからである。大学衛生学分野の西脇祐司教授に誘われ、難治性炎症性腸管障害の研究班に参加した。研究班から年間有病者数推計の全国調査をお願いされ、さっそく当時助教であった大庭真梨先生や西脇先生とともに調査を企画することとなった。まず難病疫学班の会議に出席し、「難病の患者数と臨床疫学像把握のための全国疫学調査マニュアル」を熟読した。難病疫学班と臨床班との合同事業として実施した結果、クローン病・潰瘍性大腸炎(J Gastroenterol. 2019;54:1070-1077.)の全国有病者数の推計値を24年ぶりに更新することができた。またこの余勢を駆ってクローンカイトカナダ症候群などの難治性炎症性腸管障害(J Epidemiol. 2021;31:139-144.)の全国有病者数推計も実現できた。調査にあたっては難病

疫学班の諸先生方から親身なアドバイスをうけたことを今も感謝している。

難病の臨床医学班に参加してから、臨床研究の相談を受けることが増えた。近年の難病の臨床研究で「患者レジストリ」が話題にあがることが多い。患者レジストリ研究とは、日常診療の患者をデータベースに登録し、集団(コホート)を構成したもとで追跡し、治療法(薬剤)のプロファイルや予後改善の影響等を検討するという研究である。これはコホート研究であり、どんな教科書にも基本事項として載っている。そのためか、他の研究手法に比べ敷居が低いと思われるらしい。ただ実際に研究計画書の細部を検討してみると、患者集団は治療開始例(new users)に限定するか既治療例も含めるか(prevalent users)、エンドポイントに見合ったサンプルサイズは確保できるか、治療が途中で変更した場合の解

析はどうか? Immortal time biasの問題など、日々疫学で議論されている課題に直面することは多い。「初歩的な教科書には載っていないが、疫学的思考によって解決しなければならない課題」はまだ多く、臨床班と共同して質も高い研究を実施するための(決して補助的でない)役割は、今も疫学者に求められていると感じている。

これからの難病の疫学であるが、前述した点のほかに、近年の研究環境の変化を考えると、疫学調査でもWebを介した調査法や開発業務受託機関(CRO)の活用が必要ではないかと個人的には思っている。また最近の臨床家からの相談からは「人間集団を対象とした科学の理論的中核」である疫学に対する期待を強く感じている。このような可能性と期待に応えるべく、疫学(者)が果たす責任は今も大きいと、難病の疫学を考えるたびに思う。

■プロフィール

1993年：東京大学医学部保健学科卒業、1998年：同大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了（保健学博士）、1998年：大分県立看護科学大学助手、2002年：国立環境研究所特任研究員、2005年：滋賀医科大学特任講師、准教授を経て、2014年：東邦大学医学部教授（社会医学講座医療統計学分野）に就任し現在に至る。

難病の疫学研究は私の原点

愛媛大学大学院医学系研究科疫学・公衆衛生学
三宅 吉博



1999年、特定疾患の疫学に関する研究班(稲葉裕班長)で田中平三教授のもと若手疫学者の公募があり、九州大学大学院生であった私は幸運にも採用

いただいた。2001年に横山徹爾先生、佐々木敏先生、臨床班の先生方と取り組んだ特発性肺線維症の症例対照研究が疫学者としての礎となった。対照群

が症例群より少ないという致命的な欠点を抱えながら、4編の原著論文を公表できた。永井正規班長のもと、2006～2007年度、パーキンソン病の症例対

照研究を主導した。私が福岡地区、現大阪公立大学の福島若葉先生に近畿地区を担当いただき、2事務局体制とした。計11医療機関で症例群のリクルートを行い、250例が参加した。対照群は3医療機関でのみリクルートを行い372名より情報を得た。重大な選択バイアスの問題があったが栄養等の環境要因の論文12編、遺伝要因の論文10編を創出し、貴重な日本人のエビデンスを公表することができた。私の知る限り、稲葉班長と永井班長の12年間、多

くの班員がSLE、後縦靱帯骨化症、ALS、炎症性腸疾患等の症例対照研究、全国疫学調査、QOLなど様々な研究成果を生み出したにも関わらず、伝統ある大規模な特定疾患の疫学研究班は終結した。小規模ながら2014年に中村好一班が復活するも6年継続の後消失した。私は2015年に難病の症例対照研究の根を絶やさないため、潰瘍性大腸炎の症例対照研究班を申請し、採択された。愛媛大学をはじめ全国の臨床の先生方の協力を得て、症例群384名、

対照群666名のデータセットを構築したが、3年で終了した。現時点で厚生労働省においては、公衆衛生の観察疫学研究よりも、難病患者の疾病登録が第一義となっているように感じる。今後、疾病登録が軌道に乗れば、再度公衆衛生の疫学の方にも視野が広がることを期待している。難病の疫学研究班で蓄積したノウハウの維持が不可欠である。潰瘍性大腸炎症例対照研究のエビデンス創出が未だ3編、がんばらねば!!

■プロフィール

平成5年3月 防衛医科大学校医学科卒業
平成5年5月 京都大学医学部附属病院老年科研修医
平成6年4月 静岡市立静岡病院内科研修医
平成8年4月 京都大学大学院医学研究科内科系専攻
博士課程入学
平成9年4月 九州大学大学院医学系研究科社会医学系
専攻博士課程転入学

平成12年4月 近畿大学医学部助手(公衆衛生学)
平成14年10月 福岡大学医学部講師(公衆衛生学)
平成16年4月 福岡大学医学部助教授(公衆衛生学)
平成26年7月 愛媛大学大学院医学系研究科教授
(公衆衛生・健康医学)
現 在 愛媛大学大学院医学系研究科教授
(疫学・公衆衛生学)
愛媛大学大学院医農融合公衆衛生学環教授

第33回日本疫学会学術総会開催に向けて

第33回日本疫学会学術総会会長
浜松医科大学健康社会医学講座教授
尾島 俊之



「総合知による健康・幸福の向上」：第33回日本疫学会学術総会のテーマです。総合知は、令和3年に閣議決定された科学技術・イノベーション基本計画のキーワードで、「多様な知が集い、新たな価値を創出する知の活力を生むこと」とされています。

新型コロナウイルス感染症のパンデミック、大規模災害、高齢化社会、健康格差、地球温暖化など、現代は複雑化する社会課題への対応が求められています。また、倫理や多様な価値観も重要です。さらに、IoTデバイスや人工知能(AI)などを活用した新しい研究手法が開発、実用化されています。そのため、人文・社会科学や、様々な

自然科学との融合が、これからの疫学のさらなる発展のために重要であると考えられます。そこで、総合知をテーマにした特別講演、メインシンポジウム、疫学セミナー「疫学者のための混合研究法」等を行います。また、パイプオルガン演奏や、新しい試みとして、会員の交流を促進するための自由集会など、盛りだくさんのプログラムとなっています。

ところで、新型コロナウイルス感染症流行の中で、2回の学術総会がオンライン開催を余儀なくされました。講演や研究発表を聞くことに関しては、実はとても快適で便利でした。しかしながら、学会は、やはりリアルに集まっ

て行いたいという思いも募ってきます。これは、「多様な知が集い」という意味でも重要と考えています。ただ、今後の流行状況が予断を許さないこと、業務や家庭の事情等で会場参加が難しいことも考えられることから、オンライン併用のハイブリッド開催にて準備を進めています。

浜松は「音楽のまち」で、会場に隣接して楽器博物館があります。また、うなぎ、餃子、三ヶ日みかん、遠州灘天然とらふぐなどのおいしい食べ物、館山寺温泉などもあります。

多くの皆さまにご参加いただけますよう、楽しみにいたしております。

日本疫学会プレセミナー2023 開催決定

大阪医科薬科大学 本庄 かおり

第33回日本疫学会学術総会(2023年2月、尾島俊之会長・浜松医科大学教授)において、「日本疫学会プレセミナー」を開催させていただくことになりました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成・研究力の向上に資するセミナーや演習の機会の提供を目的に実施いたします。

日本疫学会プレセミナー実施にあたっては、日本疫学会の会員からセミナー企画・実施者を広く公募しました。申請のあった企画の中から、学術委員会 疫学教育推進WGにより、下記の魅力的な企画が選定されました。

企画1

研究広報PR! ～メディア関係者とともに広報戦略を考える～
(中級・上級レベル)

【企画者】

柿崎 真沙子(名古屋市立大学)
近藤 尚己(京都大学)

【概要】

今後マスメディアと疫学関係者が連携し、よりよい医療情報を提供し、よりよい社会を構築していくためには、どのような連携が必要なのでしょう。マスメディアと今後連携していくきっかけとするため、メディカルジャーナリズム勉強会との共催で、指定の論文を題材に、メディア関係者と疫学者がディスカッションをし、広報戦略を考えていくというワークショップを実施します。

【共催】

メディカルジャーナリズム勉強会

【実施形態】

ハイブリッド方式：現地参加(定員350名)＋後日オンデマンド配信

企画2

観察疫学研究における交絡変数選択～変数を「選んで調整」することの功罪とTip(中級・上級レベル)

【企画者】

篠崎 智大(東京理科大学)
高橋 邦彦(東京医科歯科大学)

【概要】

曝露群間でアウトカムを比較する疫学研究では、ほとんどすべての状況で「交絡変数」の調整が求められる。回帰モデル、傾向スコア法、二重ロバスト法など調整方法の選択もさることながら、調整する「交絡変数」の選択自体が何より重要である。どの変数を調整すべきか・すべきでないかを統計的なテクニック「だけ」で決めることの危うさは疫学者によく知られており、近年は背景知識を盛り込んだ因果ダイアグラムの活用が広がっている。しかし、背景知識「だけ」による変数選択にも危うさがあり、統計的な変数選択法に役に立てようとする議論は今なお盛んである。本セミナーでは、変数選択の現代的なベター・プラクティスに向け、因果推論と統計的な観点から近年の論点を整理し、統計解析ソフトウェアによる適用方法まで紹介する。

【共催】

日本計量生物学会

【実施形態】

ハイブリッド方式：現地参加(定員450名)＋後日オンデマンド配信

企画3

Rで実践! 美しい Figure & Tableを作成しよう(初心者・初級レベル)

【企画者】

藤井 亮輔(藤田医科大学)
佐藤俊太郎
(長崎大学病院臨床研究センター)

【概要】

データの可視化は、研究を進める過程で重要な役割を果たしています。本セミナーでは、「記述統計→推測統計→結果の解釈」という研究の流れに沿って、Rを用いた効果的な図表の作成を実践します。Rユーザーでない参加者でも実践できるように、Rコードに対応したSASおよびStataでのコードを資料として配布予定です。また、オンデマンド配信で受講される方でも自主学習が進められるように、講義動画の配信に加えて、質問箱を一定期間設置し講演者およびチューターらが回答します。本ワークショップでは、データとコードを配布し、①Rによる可視化の基礎(ggplot2を中心に)②Rによる記述統計の可視化③Rによる推測統計とその結果の可視化を講演＋実装で行います。

【実施形態】

ハイブリッド方式：現地参加(定員50名)＋後日オンデマンド配信

プレセミナーは2023年2月1日(水) 16:00～18:00開催予定です。

申し込み方法等は総会HP(URL:
<http://web.apollon.nta.co.jp/jea2023/>)を参照してください。

皆さま奮ってご参加いただけますようお願い申し上げます。

日本疫学会サマーセミナー2022開催報告

学術委員会 疫学教育推進ワーキンググループ
大妻女子大学家政学部食物学科
清原 康介

疫学教育推進ワーキンググループでは、8月21日(日)に日本疫学会サマーセミナー2022『医学論文の読み方～疫学的視点からの批判的吟味～』を開催いたしました。今年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に鑑み、初めてのハイブリッド形式での開催となりました。現地(日本医科大学大学院棟)に4名、オンラインで48名の受講生を迎え、疫学教育推進ワーキンググループのメンバーでもある愛知医科大学医学部衛生学講座の鈴木孝太先生に講師をご担当いただきました。

鈴木先生には、医学論文を疫学的視点から批判的に吟味して読む方法のポイントについて、観察研究と介入研究に分けて解説いただきました。エビデンスとは何か、起こりうるバイアスや交絡、作用修飾、RCTにおける割付の隠蔽化やブラインド、サンプルサイズ設計など、疫学論文を読む上で重要

な事項について、事例を交えて分かりやすくレクチャーしてくださいました。

講義に続いて、受講生に10グループに分かれてもらい、チューターを交えたグループワークを行いました。ここでは、講義内で分かりづらかった点の確認や、事前課題として用意されたJournal of Epidemiologyに掲載された論文についてディスカッションしました。最後に、グループワークで出た質問事項を全体で共有し、鈴木先生に回答いただく時間が設けられました。

受講生への事後アンケートでは、「セミナーの内容が期待通りであった」、「疫学研究の理解に役立った」、「疫学研究を実施するにあたって参考になった」という声が大多数を占め、大変満足度の高いセミナーであったことがうかがえました。また、自由記述で「グループワーク内で疑問などを共有で

き、また最後に質問に対してコメントが得られよりクリアになった」、「グループワークで、疫学に関するざっくばらんな相談や情報交換ができてとてもありがたかった」などのご意見が寄せられており、グループワークも大変好評であったようです。今回は初めてのハイブリッド開催ということもあり、通信障害等様々なトラブルの懸念もあったのですが、終わってみれば大きな混乱もなく、無事閉会を迎えることができました。ひとえに、会場を手配してくださった日本医科大学の陣内裕成先生や疫学会事務局の皆さまの入念な事前準備のおかげかと思います。

最後に、講師を務めてくださった鈴木孝太先生、グループワークに際してチューターを担当くださった疫学の未来を語る若手会の世話人の先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



Editor in Chief 就任のごあいさつ

国立がん研究センター がん対策研究所
予防検診政策研究部長
片野田 耕太



2022年1月より松尾恵太郎先生の後を継いでJournal of Epidemiology (JE) 編集長を務めさせていただくこととなりました。JEは1991年に創刊し、2005年に1,247だったインパクト・ファクターは2021年には3,809まで上昇しました。5年インパクト・ファクターは2008年の1.991から2021年の4.748まで上昇しており、JEの論文の価値が長いスパンで評価されていることを示しています。投稿論文数は2008年に約150件だったのが2021年では500を超え、うち半分以上が海外からの投稿です。これらの成長は、歴代のJEの編集長、編集委員、編集事務局メンバー、著者、読者の皆さまの貢献の賜物です。先達が築いてこられたJEをさらに発展させていく所存です。

私が日本疫学会員となったのは大学院を修了した2002年で、ちょうど20年前になります。文系出身で大学院では脳機能画像の研究をしておりまして、「疫学」は正直ど素人でした。疫学の仕事で最初に携わらせていただいたのは、神経芽細胞腫のマス・スクリーニングの研究です(群馬大学の林邦彦先生にご指導いただきました)。このテーマではJEに論文とエディトリアルを書かせていただき(JE. 2009;19: 266-70, JE. 2016;26: 163-5)、国立がん研究センターに入職するきっかけにもなりました。JEに初めて筆頭著者として論文を発表したのは2008年で、喫煙の人口寄与危険割合の論文でした(JE. 2008;18: 251-64)。私のたばこ研究の出発点です(祖父江友孝先生にご

指導いただきました)。

自らの疫学人生に大事な発表の機会をいただいたJEを、今度は自ら率いる立場になり、重い責任を感じるとともに、思いっきり楽しみたいと思っています。JEの今後の方向性としては、これまでの路線を引き継ぎ、質の高い疫学研究で日本および世界にインパクトを与えうる雑誌として、さらに存在感を示していきたいと考えています。さっそく取り組んでいるのはホームページの改変とSNSのスタートです(近日公開予定)。来年の浜松の学術総会では編集委員会企画「インパクトのある論文の書き方と広め方ーSNS活用術」も開催します(2月2日(木) 15:30-17:00 A会場・中ホール)。今後のJEの動きに益々ご注目ください。

■プロフィール

1996年東京大学法学部卒、2002年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了後、国立健康・栄養研究所研究員として国民健康・栄養調査の分析などに従事。2005年より国立がん研究センター(旧 国立がんセンター)研究員としてがんの統計、予防(特にたばこ対策)、政策評価の研究を行っている。2021年より現職。主な著書に『本当のたばこの話をしよう 毒なのか薬なのか』(日本評論社)。

日本医学会連合 社会部会 第1回若手リトリートの報告論文 (JMA Journal) について

Harada et al., JMA J 2022; 5(3) : 356-361.



帝京大学
桑原 恵介

日本疫学会からご推薦いただき、日本医学会連合社会部会若手リトリートの企画・運営に携わってまいりました。今般、第1回リトリートにて若手が議論した、社会医学のあるべき姿に向けた諸課題をまとめた論文 <https://www.jmaj.jp/detail.php?id=10.31662%2Fjmaj.2021-0219> が日本医師会・日本医学会の機関誌JMA Journalに掲載されましたので、その内容を経緯と合わせて簡単にご紹介いたします。

日本医学会連合は、日本の医学界を代表する唯一の学術的な全国的組織の連合体で、研究を促進し、医学と医療水準を向上するための取り組みを行っています。現在、日本医学会連合は臨床部会(107学会)、社会部会(19学会)、基礎部会(15学会)の計141学会からなります。設立の歴史的背景は日本医学会連合門田守人会長の特別寄稿論文に詳しいです(門田、日外会誌、2018)。

この基礎部会で若手リトリート(一泊二日の研究交流会)が開催されたことから、社会部会においても若手の研究を促進し、またキャリア形成を支援するために開催が決まりました。こうした若手による学会横断的な宿泊形式のイベントは、本邦の社会医学史上、

初の試みだったようです。社会部会内では、本学会が唯一、若手が合宿をしていたこともあり、筆者が実行委員長をお引き受けいたしました。

社会部会若手リトリート実行委員会には11名・10学会の若手研究者が参画し、企画・運営会議を重ねました。2020年3月5日(木)～6日(金)に、日本住血吸虫症撲滅で知られる山梨で、学会の枠組みを越えた若手の交流の場としてリトリートを行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症により、2021年3月5日(金)にオンラインで延期開催しました。当日は37名(若手研究者30名・15学会、オブザーバー1名、シニア委員1名、社会部会役員5名)が参加しました。

リトリートでは「コロナ禍で人々のために社会医学はどう変わっていくべきか」をテーマに意見交換を行いました。その結果、表に一部の例を挙げましたが、研究、実務、社会貢献、教育に関する様々な論点が提起されました。これらの論点は網羅的・体系的ではなく、参加者属性に偏りもあります。そのため、若手が今後、どうしたいと考えているかを理解するには、よりしっかりとした調査が必要です。しか

し、こうした若手の考えや認識が表に出る機会は限られていましたので、知る契機となることを期待して、関係者の許可を得ながら実行委員会の有志でとりまとめ、JMA Journalに発表しました。

保健・医療上の社会課題は複雑化・高度化しており、一つの領域内で一致団結して対処することはもちろん大事ですが、異なる専門性を持つ専門家がチームを組む重要性も増しています。日本ならではの、真に実社会に役立つ科学的知見の創出に向けて、多様なステークホルダーに快く参画していただくための創意工夫も欠かせません。そうした領域を越えて、研究を促進していくための場として、日本医学会連合社会部会では若手フォーラムを定期開催しています。研究活動の促進のために、フォーラム・リトリートの場をお使いいただけましたら幸いです。

最後に、本報告を後押しくださった疫学若手の会元代表の尾瀬功先生、若手リトリートにてシニア委員としてご指導くださった曾根博仁先生、実行委員の秋山有佳先生、参加者募集等でお力添えいただいた事務局はじめ、関係者の皆さまに改めて感謝申し上げます。

表．日本医学会連合社会部会リトリート 2019 で提示された社会医学・公衆衛生上の課題の例

テーマ	サブテーマ
研究	迅速なエビデンス創出、研究環境、分野横断的なネットワークづくり、研究テーマ（対策の効果検証、倫理的課題への対応、生活困窮者など）、成果公表（プレプリント活用を含む）
実務	エビデンスに限られる中での感染対策、他の専門領域との連携、オンラインコミュニケーション普及に伴う情報リテラシー、在宅勤務時の健康管理、危機発生時におけるシステムの柔軟な運用・変更
社会貢献	社会との対話、科学コミュニケーション・リスクコミュニケーション、インフォデミック対策、専門家の情報発信、国民のヘルスリテラシー、アウトリーチ活動
教育	授業のオンライン化に伴う課題：オンライン授業を行う・受けるスキル、情報環境格差、オンライン授業の健康影響

Harada et al., JMA J 2022 および開催報告書 https://www.jmsf.or.jp/activity/page_715.html を基に作成

IEA-WP/JEAジョイントセミナーのご報告と 日韓台シンポジウムのご案内

国際化推進委員会委員長
国際疫学会西太平洋地域理事
郡山 千早

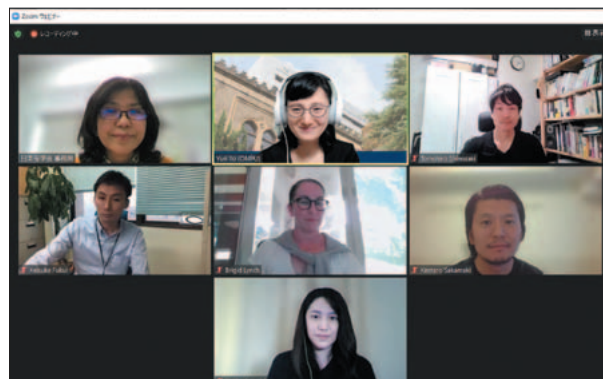


去る2022年3月26日にウェビナー形式で、日本疫学会と国際疫学会（西太平洋地域）とのジョイントセミナーを行いましたのでご報告します。セミナーのタイトルは“How to treat missing data”ということで、疫学研究のデータを扱っている会員の皆さまにとっては、関心が高い内容であったかと思います。直前の日本疫学会学術総会プレセミナーでも講師を務めておられた新進気鋭の若手の先生方に、少し初心者向けの内容で…という願いをし、多大なご協力をいただきました。篠崎智弘先生（東京理科大学）、坂巻顕太郎先生（横浜市立大学）、福井敬祐先生（広島大学）に、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。また、モデレーターとして、円滑な司会進行を務めていただきました伊藤ゆり先生（大阪医科薬科大学）、準備と当日運営にご協力いただきました片桐諒子先生（国立がん研究センター）にも心より感謝申し上げます。2時間のセミナー中、質問も多くいただき、このテーマ

に対して時間が足りなかったと反省しております。オンデマンド配信の視聴者も含めて160余名の方にご参加いただきました。本ジョイントセミナーは、オーストラリア疫学会からの声かけもあり、西太平洋地域の疫学者が参加しやすい時間帯に設定した企画でしたが、なんとデンマーク、ハンガリー、チュニジアといった国々からの参加もありました。早起きして参加していただいたようです。

また、第33回日本疫学会学術総会（浜松）におきましては、国際化推進委員会で日韓台シンポジウム（2023年2月3日）を企画しております。近年、レセプト情報と疾病登録のリンケージ利用が進む中、大規模データを活用してがん検診やワクチン接種などの疾病対策の効果を検証する試みが各国で進んでい

す。本シンポジウムでは、データリンケージに取り組んでいる以下の先生方にご登壇いただき、取り組みの事例の紹介をしていただきます。日本：木村尚史先生（北海道大学）、韓国：Jaehun Jung先生（Gachon University）、台湾：Hung-Yi Chiou 先生（Institute of Population Health Sciences, National Health Research Institutes）。疫学研究成果の政策評価への活用のために、今後求められる研究環境整備の方向性について議論できる場になれば幸いです。多くの会員の皆さまのご参加をお待ちしています。



研究室紹介

近畿大学医学部公衆衛生学教室

今野 弘規



2013年のニュースレター「事務局長および事務局紹介」以来の登場となります。

さて、今年の4月に着任してから半年ほどが経ちました。医学部開設50周年を機会に、現在の大阪狭山キャンパスは2025年11月に堺市泉ヶ丘駅前へ移転します。現在の教室員は、私のほか、高嶋直敬准教授、由良品子医学部講師、この7月に着任した田中麻理助教、秘書2名、そして、前任の伊木雅之客員教授・名誉教授です。

着任当初は、前職とはシステムも風土も大きく異なる中で事務手続きやら研究の倫理申請やらで、何かと戸惑うことも多かったのですが、逆にそれが全て新鮮でもありました。さらに、着任早々IR委員会委員長を始め、あれよあれよという間に10を超える委員会や会議のメンバーとなり、話題についていくのに精一杯でした。また、医学生に対する垂直統合型教育にチュートリアル教育、1

年生からの地域包括ケア実習の準備に6年生に対する国試解説など、医学教育に関する新しい学びの機会も多くなっています。

本教室は大学院生0という状況ですが（卒業生の多くは開業医になるため）、自身がこれまで30年近く携わってきたCIRCSを主とした、地域の疫学研究に根差した生活習慣病予防の分野には、やはり多様な人材が必要です。そこで、臨床医学との共同研究による人材交流を見据えて、40ほどある全ての臨床医学の教室にご挨拶に回りました。その甲斐あって、共同研究やフィールド調査での人材面での協力、あるいは大学院生の指導・育成のことでお話をいただける教室も出て来ました。また、7月に開催された近大医学

会総会において、「還暦のCIRCS」と題する特別講演をさせていただいた直後、複数の教授の先生方から、たいへん興味・関心を惹かれた旨のお言葉を直接頂戴する機会にも恵まれました。

まだ新しくスタートしたばかりの教室ではありますが、CIRCSの伝統を受け継ぎつつ、新しい研究や人材の発掘・育成に力を注いで参りたいと思います（もちろん医学生教育や各種委員会活動にも）。



■プロフィール

1993年筑波大学医学専門学群卒業。1997年同大学院博士課程修了。同年大阪府立成人病センター集団検診第Ⅰ部医員。2001年大阪府立健康科学センター医長、2006年同・主幹兼医長。2009年大阪大学大学院医学系研究科・助教、2016年同・准教授。2022年近畿大学医学部公衆衛生学・主任教授（現職）。研究分野は主に脳卒中・心臓病のリスクファクターに関する地域疫学研究。2013年1月～2018年1月日本疫学会事務局長。

事務局だより

1) 登録情報更新のお願い

ご異動などによりご所属先や住所に変更のありました会員の皆様は、会員登録情報の更新をお願いいたします。会員専用ページ(<https://coco.cococica.com/jea/>)にログインし、「登録内容確認・変更」をクリックして、ご登録情報を更新してください。

※ログインIDは、ご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定してください。

2) 会費納入のお願い

2022年度(2021年12月～2022年11月)までの会費を未納入の方は、すみやかにお支払いくださいますようお願い申し上げます。2023年度の会費につきましては、2022年12月にご請求させていただきます。

3) JE冊子購読のお申込み

Journal of Epidemiologyの冊子の年間購読料(2号合本、年6回発行)は、会員：9,000円、非会員：26,000円(送

料込)です。2023年(Vol.33)のご購読をご希望の方は、事務局へお申込みください。

4) 日本疫学会会員数：2,594名

(2022年10月1日現在)

名誉会員：33名 代議員：211名

普通会員：2,350名

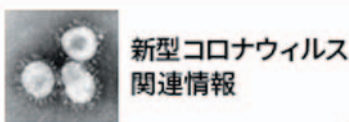
編集後記

おかげさまで、無事、ニューズレター第60号を発行することができました。ご寄稿いただいた先生方、学会事務局の糟谷様、誠にありがとうございました。

今回は特集として「難病」を取り上げてみました。疫学会では、多岐にわたるテーマを扱っていますが、やはりがんや循環器、感染症、災害など、その時の社会課題が着目されます。難病は稀少疾患という特性から扱っている研究者が少ないのですが、疫学センスが生きる分野でもあり、ぜひ若手の先生方にも興味を持ってもらえたらと思いました。

さて、この編集後記を書いている現在は、新型コロナウイルスの第7波もピークを越えて、少し日常が戻ってきたように感じています。新型コロナウイルスが出現してもうすぐ3年、過去2回の学術総会はオンライン開催となりましたが、今年度はハイブリッド開催ということで、久しぶりに一堂に会せることを大変ありがたく、楽しみにしています。学術総会や各種セミナーなどを通じて会員同士が交流し、さらに疫学が発展することを祈念しています！

(大阪公立大学大学院医学研究科公衆衛生学 大藤 さとこ)



【広報委員会より】

新型コロナウイルス関連情報特設サイト (<https://jeaweb.jp/covid/>) を、2020年3月2日に開設し、疫学的用語等の解説、研究紹介、有用なリンクの他、学会からの要望書を掲載しています。会員からの積極的な情報提供やご意見を期待しています。

発行 一般社団法人 日本疫学会 〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-2 本郷MTビル4階 ☐ jea@jeaweb.jp

©Japan Epidemiological Association All Rights Reserved.